

牛群検定通信 No.193

～早産について～

牛群検定では分娩年月日や授精年月日の報告を頂いているので、妊娠期間についても集計分析しております。今回はその中から早産について紹介します。

(1) 牛群検定における早産

牛群検定では、「早産」は検定時の報告対象になっていないことから、授精と分娩の報告から妊娠日数を分析し以下のように集計しています。獣医学的なものとは異なります。なお、子牛の生死は問いません。

妊娠日数 180日未満 流産

妊娠日数 180～270日 早産

妊娠期間を統計的に分析すると、データ分布は平均値を中心とした精緻な正規分布を示しています。平均値は278.8日と定説の280日とほぼ同一です。標準偏差4.63日となっています。この標準偏差の2倍より広い平均値から10日間以上外れる180～270日の妊娠日数の分娩を機械的に「早産」として分析しています。あくまで分析上の便宜的なものです。

（２）早 産

早産は、夏季に頻度が高まる傾向があります。夏季の暑熱ストレスにより、乾物摂取量が減退し栄養的に妊娠を維持できなくなるためと言われています。そのため、暑熱の厳しい都府県の方が夏季の早産頻度が高くなっています。これは、逆に夏季の暑熱対策を効果的に行えば、早産を効率的に改善できるというポイントでもあります。

（３）乾乳牛

早産対策としての暑熱対策は乾乳牛に対して行うものであることをご注意下さい。搾乳牛の暑熱対策は十分でも、乾乳牛の飲水や送風扇は不十分になっていませんか？夏季の早産が多い農家では乾乳牛舎への送風扇設置も検討してみてください。

（４）早産と検定成績

早産は、農家にとって予期せぬ事態ですから、繫留状態での分娩事故に直結し、死産や子牛の早期死亡の原因となります。また、分娩前後の移行期におけるカルシウムや濃厚飼料の馴致といったセンシティブな飼養プログラムを割愛してしまったことから、その後の低カルやケトーシス等の周産期病罹患の原因となります。もちろん、乳量も低減化するのが一般的です。また、子牛も虚弱となることが多く、発育に影響が残ります。

早産については、検定成績表では個別の表示はありません。しかし、乾乳日数の情報から読み取ることができます。故意に乾乳期を短縮していなければ、乾乳日数３９日以下は早産した牛、もしくは、分娩予定日を農家が誤認した牛となります。特に、ここで挙げたように夏季は早産しやすいので、乾乳牛にも暑熱対策が必要となります。

（相原）